

r e p o r t

事例レポート ③

## 老いを豊かに～主体的住民参加と介護施設の運営

社会福祉法人さつき会

特別養護老人ホーム鷹栖さつき苑

住み慣れた地域で「老いを豊かに」のキャッチフレーズの下、ユニットケアと小規模多機能型介護施設などの整備により、いち早く先進型施設の導入と運営を進めてきた社会福祉法人さつき会。しかし、それだけでは豊かな老いは迎えられないと自らの施設運営を厳しく評価し、「一体何が足りないのか」と自らに向けて問いただした施設長の波瀾幸敏さん。

どうしたら施設で本当に豊かな老いを迎えられるのか。町の福祉担当課と二人三脚で始めた勉強会による下地づくり、住民を本気にさせたリーダー講演会、事業所職員と住民との信頼関係を築いた住民勉強会と訪問調査…。新しい介護施設を建てる前に、その運営に住民が主体的に参加する機運を3年間かけて醸成してきた。自分たちも将来この町で老いてゆく。ならば豊かに老いてゆく環境を自分たちでつくっておこう。誰のためでもない、自分たちのための住民による住民主体の「地域安心拠点」づくりについて、波瀾さんが話してくれました。



社会福祉法人さつき会  
特別養護老人ホーム鷹栖さつき苑施設長  
常務理事・施設長 波瀾幸敏さん

### 住み慣れた環境に居つづけられることの大切さ

この10年、介護保険制度もできて、20年前と比較して物的にはいろいろな支援を受けられるようになりました。私が勤めている社会福祉法人さつき会は、10年前からユニットケア<sup>※1</sup>や小規模多機能介護施設<sup>※2</sup>を整備するなど、当時としては先進的な施設整備や運営にいち早く努めてきました。しかし、老人ホームへの入居者や農繁期で家族が面倒をみれない時期に自宅介護されていた老人が短期入居されても、不安な表情を見せたり徘徊したりする状況が大きく改善されるということにはなりませんでした。

施設水準や運営体制の改善によって、必ず老人の症状は改善していくものと確信していましたので、入居者の目立った改善がないことに気づかされたとき、それは認知症など入居者の抱える病気が原因だと決めつけていました。しかし、原因の多くは入居によって住み慣れた家族や地域から離れて孤立した施設での生活となるなど、環境を大きく変えることがお年寄りを不安にさせ、認知症状などを進みやすくし、ねたきりを助長することがわかってきました。このような経験を通して、介護保険などの制度の枠組みの中だけでは「老いは豊かにならない」というのが私が得た結論でした。

そして、環境の変化が多くの老人を不安に陥れる大きな原因になっていることから、入居者、利用者には、自分が暮らしてきた地域の環境とともに、地域住民との交流が絶えない環境が必要だと考えるようになりました。

では、どのようにして地域の中で人と人のつながりを絶つことなく生活してもらえるか。入居者や利用者の傍に住民を縛りつけて居続けるようにすることは到底できません。そうではなくて、住民が自ら通いたくなる場所が介護施設に併設してあれば、進んでそこでいろいろな活動を楽しむようになります。それが、住民のニーズに基づいたものであれば、その活動は長く続きます。そのとき初めて、入居者・利用者の拠点と地域住民の拠点が共通の場として重ね合うようになるのです。

#### ※1 ユニットケア

「配属された職員が患者・入居者・利用者の看護・介護・要望・苦情に迅速かつ柔軟に判断・対応ができるよう、規模を縮小した看護・介護の提供態勢」個別ケアを可能にしたり、入居者と利用者がかおなじみの関係になれるなど様々な利点があるとされている。

#### ※2 小規模多機能介護施設

「通い」を中心として、要介護者の様態や希望に応じて随時「訪問」や「泊まり」を組み合わせてサービスを提供する介護施設。

### 住民による介護施設運営への参画

鷹栖町は人口約7,500人。町は珍しく、市街地が大きく二つの地区に分かれています。鷹栖地区と北野地区です。当時、特養老人ホームが鷹栖地区にしかなく、入居待機者が80人もいましたので、介護施設のない北野地区に新しい介護施設を作ってほしいとの要望が多く出ていました。事業者の私たちも、これまでの経験を通して、せっかく北野地区に作るのだったら、「老いを豊かに暮らせる介護施設」と呼ぶにふさわしいものを作りたいと考えるようになっていました。

最初に考えたことは、「施設」をつくるのではなく、「拠点」を作ろうということです。つまり、地域の安心となる拠点、「地域安心拠点」です。私たちは、まず、拠点を作る人と人のつながりをつくることから始めました。

平成17年11月から半年間かけて事業所の幹部と行政の福祉担当、社会福祉協議会で勉強会を行いました。その後、町の各団体の協力を得ようと各団体のリーダーを対象にした講演会を行いました。その講演会で、「住民の力や知恵を借りたいのだったら、一肌脱いでもいいよ」と言ってくれる人と出会いました。澤口隆さんという、開拓農家の3代目で、地域のまとめ役をしていた方です。母親の介護の経験もされていました。すぐにお宅にうかがって、介護施設整備に住民が主体的に参加してくれる動きをつくりたいと率直に相談しました。澤口さんはその2日後には仲間15人に話を通して、その名簿を渡してくれました。そして、「波瀲さんが自ら足を運んで説明し、このメンバーに本気度が伝わるかどうかで、今後、住民が主体的に参画するかどうかが決まるのだ」と教えてくれました。



そうして平成18年7月に、15人の住民による勉強会がスタートしました。「北野の介護を考える住民と事業所の勉強会」です。

その後、事業所職員と住民が二人一組になって北野地区の訪問調査を行い、住民一人一人の介護施設への要望を聞き取りました。また、先進施設の視察にも行き、その夜の会合では活発な意見交換をしました。

また、建設の基本設計段階から住民の意見を反映し、交流スペースは当初、全面フローリングだったのを一部畳の小上がりに改善しましたし、中庭の花壇も作物の育ちがよい方向へ位置を変更しました。調理室は各ユニットの中間に配置して、調理場から食事をしている光景が見えるようにして、入居者も従業員と会話ができるようにしました。勉強会は長い時間をかけて、ひとつひとつ丁寧に進めることで、住民の方々は自分たちの施設なのだという思いを持ってくれるようになりました。

結局、北野地区の介護施設は、サテライト特養と小規模多機能型居宅介護を併設し、そこに地域交流スペースが加わり、その交流スペースを住民の会が主体的に運営していくという方向で整備され、文字どおり「地域安心拠点<sup>※3</sup>」として今日まで来ています。

### 交流拠点の運営から住民の拠点的活動へ

交流施設は住民勉強会の発展的組織である「ぬくもり友の会」が主体的に運営し、常に地域と介護施設利用者に開かれた施設として運営されています。メンバーは57名います。事業所からは私と管理者が世話役として相談に乗る形で、細かい取り決めは全くありません。あくまでも住民の意思を反映して運営されるものだからです。

毎週火曜日には喫茶店がオープンします。友の会のメンバーが交代でマスターとウエイトレスをやっています。地域住民がコーヒーとおしゃべりを楽しむ憩いの場となっています。月に何回かは麻雀サロンや手芸サロンが開かれています。もちろん、勉強会が母体ですから、「老いと介護」を学ぶ勉強会も年3、4回行わ

※3 地域安心拠点

正式名称は地域安心拠点「ぬくもりの家えん」。ユニット型地域密着型特養ホーム、小規模多機能型居宅介護及び地域交流スペース・介護予防拠点から成っている。



れますし、年一回は先進施設の視察や研修旅行も行います。夏は焼肉パーティと冬の忘年会で職員と住民の親睦を深めます。中庭では花壇作りや菜園作りも行なっています。農家の方が畑で苗を2割くらい多めに作ってくれていて、それを持ってきてくれるのです。

また、中庭は、隣接して立地する幼稚園児のマラソンコースになっており、園児は中庭から施設の窓を開けて入居者のおじいちゃん、おばあちゃんにあいさつをしていくのです。

6月下旬から9月まで毎週土曜日には駐車場で朝市が開催されます。友の会のメンバーが「私が入居しても寂しい思いをしなくても済むように」と発案したことがきっかけで始まりました。1コンテナスペース当たり100円で誰でも出店できるようになっています。朝市では、農家の新鮮な野菜が並べられ、住民と入居者が久しぶりの再会を果たしたりすることもよくあります。

交流スペースの活動は、中庭、駐車場など施設全体に広がり、さらに、調理場での調理は地域住民の子育て母さんがやってくれていますが、働いている間、お



地域安心拠点の中庭を走った後、あいさつをする幼稚園児たち

子さんを食堂で遊ばせることもでき、入居者にとってはお孫さん世代との交流が自然とできるようになっています。

地域住民は友の会の活動を通して、自分たちの将来の老いの姿を想像しながら生活することができ、実際に入居者や利用者になったときには、過去にこの拠点で活動してきた延長で自然な形で施設を利用することができるようになります。すなわち、入居して老いを暮らすことが地域での暮らしの延長になり、そこには自分たちが交流し関わってきた空間があるのです。それが豊かな空間であることは参加した住民の主体性を見れば一目りよう然です。

### これからも本気度を住民と確認し合う作業が続く…

これまで住民参加という言葉は、行政などの都合で形式的に使われることが多かったと思います。今回、事業所は本当に住民に主体的に運営してもらう気があるのかどうか、住民は本気で主体的に運営する気になれるのかどうか、ということが常に問われました。勉強会は両者の本気度を確かめながら信頼関係を築いていくという、時間をかけた根気のいる作業でした。

多くの人との出会いや思いによって、今回の住民の主体的な動きになりましたが、もともと鷹栖町は昭和の時代に取り組んできた予防医療を軸とした「健康と福祉の町」の先進地です。町民一人ひとりの健康に対する意識も高く、今回の勉強会で行なった北野地区の訪問調査でも、突然の訪問にも関わらず、積極的な意見をどんどんいただきました。これまでの、行政や住民、医療介護福祉分野の活動の積み重ねの上に立っているのだと実感させられることがよくありました。

今後は、今回の北野地区で実現した地域安心拠点の整備と住民による主体的運営のノウハウを、これまで整備運営してきた鷹栖地区に活かしていかなければなりません。これからも本気度を住民と確認し合う作業が続きます。